

「被害状況は、流石に演習ということもあって軽傷者のみにとどまっています」

「まあ、そりゃそつだろつな」

ガストはラグゴイルの報告を聞きながら、自分の左肩のダメージを計ろうと左腕を持ち上げようとす。しかし鈍痛が走り肩は上がりきれないまま、ガストは仕方なしに左腕を降ろした。

「あまり無理しないで下さいよ」

ラグゴイルがちつとも心配してなさそうな声でガストに注意した。

「無茶しないで切り抜けられる状況じゃなかっただろつが」

苦笑しながらも、ガストは目の前に立つラグゴイルを見上げた。

「それも分かつてます」

ラグゴイルは表情を変えず、いけしゃあしゃあと答える。

「分かつてんなら文句言つなよ」

ガストはぶつぶつぶつぶつやきながら、自分の右手に居るはずの副長を振り返る。しかし、そこにはトレアの姿はない。ガストは溜息をついて器用に自分の左肩に包帯を巻きはじめた。

ラグゴイルは軽く肩をすくめて、手にしたメモを小脇に抱える。

「手伝いしましょうか？」

「いらん」

ガストは短く答えてから先程の戦いを改めて振り返った。

ラダロス銀剣騎士団。強烈な強さを持つ騎士団だった。噂で聞くものと実際に剣を交えたものでは全く印象が違う。前評判通りの守勢に回った時の粘り強さだけでなく、そこから攻勢に打って出る自在さを持ち合わせていた。

そして、攻勢に出た時の驚異的な突破力は目を見張るものがある。それは、第三師団長として先程の戦いへ打って出たリーバル・ハイランドの力による所が大きい。リーバルだけでなく副長と呼ばれていたイエーラ・ヴァロルもかなりの実力の持ち主と見ていい。

強烈な強さを誇る将と、堅牢な護りを長時間維持できる部隊長。その組み合わせは、本陣を深く構えることによって、敵の攻撃を受けきった後に攻勢へと転じることができる実力を示唆していた。

一般的に受けに回った軍は、攻勢に転じることが難しい。それは、攻勢に転じるタイミングをつかむのが困難であるというのも理由のひとつだが、守勢から押し返すには始めから攻勢として打って出る二倍以上の力を出さなければならぬ。

しかし、ラダロス銀剣騎士団は攻勢のタイミングも、守勢から攻勢へ打って出る強靱な力も僅か数名でどうにでもできるのだ。更には、将をも含む僅か数名の精鋭が敵陣へと切り込むことによって士気をあげることができる。この士気によって軍勢は全く違った動きを見せるのだ。そういった事を考えるうちに、ラダロス銀剣騎士団が西域において有数の実力を誇る騎士団だということが納得できた。

「あんまり敵にはしたくない相手だな」

「ラダロスを敵にするということとは、ラムシュタイン王国を敵にするということですからね」

ガストのつぶやきを耳聴きききつけたラグゴイルがさかさず突っ込みを入れた。

「そりゃそつだ」

ガストは苦笑いを浮かべながら、左肩の包帯をきつく縛ろうと歯を食いしばった。

「手伝ってやるか？」

突然テントの入り口から男の声がした。

ガストが入り口に目を向けると、白いローブに身を包んだ男がそこに立っていた。

「来ましたよ」

ラグゴイルが、入り口を振り返りもせずにつぶやいた。

「なるほど、確かに言うとおりだな」

ガストは包帯の端を結び終えると、ニヤリと笑って姿勢を正した。

「なんだそりゃ？オレが来るのを待ってたつてえのかよ？」

リーバル・ハイランドは白いローブを脱ぐと、後ろに控えていたイエーラにローブを渡した。

「失礼ながら、こういうことになるのかと思ひ、お待ちしておりました」

ガストが片膝をついた状態で深々と頭を下げた。ラグゴイルもガストに習って同じ姿勢を取る。リーバルの顔に気恥ずかしいようなくすぐつたいような表情が浮かんだ

「おいおい、やめてくれよ。儀礼的なのはどうにも苦手だな。そんなもんは王宮の中だけにしておいて欲しいわ」

リーバルの後ろでイエーラが苦笑いを浮かべていた。鬼神のような戦いぶりからは想像できない表情に、ガストは素直に感心した。

「んで、傷の方はどうよ？」

リーバルが身を屈めてガストの包帯を心配そうに見た。

「申し訳ない。師団長は戦いと女の事になると手加減が出来なくなるもので」

イエーラがリーバルの後ろから身を乗り出して言った。途端にリーバルが反応する。

「おい、イエーラ。そんな言いぐさはないだろ？」

「本当のことを言っただけです」

「女のことはともかく、戦いの方はそこまで見境なくならんぞ？」

「どっちの事に対して抗議してるかと思えば・・・」

イエーラは額に手を当ててためまいを感じたかのようによろめいた。

「腕は動くのか？」

「多少は・・・」

ガストは左腕を胸の高さまで持ち上げた。リーバルが驚いたように目を輝かせる。

「ガスト殿、貴殿の斧は我流ですか？」

イエーラもやはり驚いた様子でガストの左腕を見つめている。

「恥ずかしながら、我流で誰にも師事したことはありませんが」

リーバルはニヤリと笑い、そうかそうかとうなずいている。イエーラは更に驚いた様子でガストの左腕を取り、動かしてみた。

「痺れだとか違和感はない？」

「痛いのは確かです」

ガストは二人のオーバーなりアクションに疑問を感じながらも、自分の左腕を動かしているイエーラの様子を見て苦笑する。

イエーラはガストの視線に気づき、慌てて手を離れた。

「どういうことか、ご説明願えませんか？」

ラグゴイルが尋ねた。

「師団長の白打は、東方の天轟七鍵流でして、その攻撃のひとつひとつにじゅうぶんに練り込まれた七鍵勁が乗っています」

リーバルの代わりにイエーラが答える。リーバルはイエーラの説明に得意げな顔をして、七鍵流の型を演舞し始めた。

イエーラはそんなリーバルの姿を視界の片隅に捕らえたが、まるでそこにリーバルがいないかのような様子で表情一つ変えずに説明を続けた。

「その七鍵勁の攻撃を受けた場合、発勁の訓練を受けてない者は、攻撃を受けた場所を中心に神経、筋肉ともに麻痺状態に陥ります」

イエーラの説明にラグゴイルがガストを見つめる。

「なるほど。隊長がバケモノだってことがまた証明されましたね」

「人をバケモノ呼ばわりすんなよ」

ガストはラグゴイルとイエーラの居心地の悪い視線を避けるように目を逸らした。

「西洋でも剣術の中に『ブライナ』という概念を取り入れている古流の流派がありますが、そういった流派は実践的な剣術に駆逐されて、今はほとんど残っていないというのが現状です」

イエーラの続く説明を受けてラグゴイルの疑わしげな視線が更に強まる。

「さつきも言った通り、オレは誰にも師事したわけじゃない」

「ですがある程度剣術を極めた者ならば、自然にブライナを使って戦えるようになります」

「だったら、別におかしくないじゃないかよ」

ガストは非難じみた視線でラグゴイルをにらみ返した。ラグゴイルはニヤニヤと笑っている。

「しかし、それでも師団長の白打は強烈でして・・・ブライナを使いこなせている者でも、

多少の痺れや違和感が残るのですが・・・」

「つまり・・・アンタがそれだけ強ええってことだ」

リーバルの強引な結論付けに、ラグゴイルがほらね？といった感じで肩をすくめてみせた。

「で、オレを待っていたっていう理由を聞こうか？」

リーバルは身を乗り出して言った。

「オレに対して自分を売り込む必要があるんだろ？」

ガストはこれまでのいきさつをかいつまんで語った。

「なるほどな・・・」

「タラス傭兵団の副長といえば、確か金の疾風の異名を持つ女性だったのでは？」

「名前はトレア・キリム」

「ほーあ？」

ガストの言葉とリーバルの反応を見て、イエーラはしまったという表情を浮かべた。

「いい女か？」

リーバルは更に身を乗り出してガストに詰め寄った。

「いい・・・女です」

ガストはリーバルに気圧されながら嫌な予感を覚えた。

「そりやもう、ウチの団長が惚れてるくらいですから」

ラグゴイルがニヤニヤと笑いながら言った。

「おい、ラグゴイル・・・」

「そんないい女が、卑怯なテロリストに囚われているってのか。そいつあけしからんな」

リーバルは腕を組み、右手を顎に当てながらうなった。

「でっしょう？」

ラグゴイルがリーバルの思考パターンを捕らえたのか、更に煽るような言葉を重ねる。

「そいつあ、何がなんでも助けるべきだな。よし、ガスト、オレに任せとけ」

「・・・ありがとございます」

「なに、いい女つてのは男にとつての共有財産だ。気にすんな！」

リーバルがガストの肩をポンと叩いて、わははははと笑った。

「はあ・・・」

ガストは力なくリーバルの心強い返事に応えた。

イエーラはリーバルの背後で頭を抱えている。

ガストはますます話がややこしい方向へと向かっていることを感じずにいらなかった。